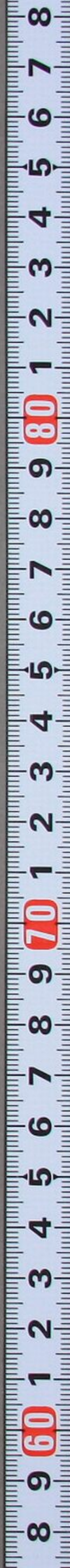




紫式部日記註釋

一



松の屋藤井大人
清水宣昭大人
著述

紫式部日記註釋

東京

光文書房



紫式部日記釋乃意ノ

りかしこゝに記すべし...
ぬふり...
え...
い...
あ...
ゆ...

○紫式部日記卷一

○序一

一 本 山 崎 村 小 山 崎 村
 一 山 崎 村 小 山 崎 村
 一 山 崎 村 小 山 崎 村
 一 山 崎 村 小 山 崎 村
 一 山 崎 村 小 山 崎 村
 一 山 崎 村 小 山 崎 村
 一 山 崎 村 小 山 崎 村
 一 山 崎 村 小 山 崎 村
 一 山 崎 村 小 山 崎 村
 一 山 崎 村 小 山 崎 村

一 山 崎 村 小 山 崎 村
 一 山 崎 村 小 山 崎 村
 一 山 崎 村 小 山 崎 村
 一 山 崎 村 小 山 崎 村
 一 山 崎 村 小 山 崎 村
 一 山 崎 村 小 山 崎 村
 一 山 崎 村 小 山 崎 村
 一 山 崎 村 小 山 崎 村
 一 山 崎 村 小 山 崎 村
 一 山 崎 村 小 山 崎 村

一、いづれに...
うさき...
おろく...
一、...
うた...
おれ...
と...
と...

と...
う...
い...
あ...
か...
れ...
あ...
あ...

とららるるにあらはれはまじり
てはうらうらとせしむるにけり
たのづからしむるにけり

さうらうら

天保四年乃末

松齋藤中一之為

紫式部日記款

凡例

この日記は、はなはくあつての事、今世に流し伝へ、あつたにま
なり。せしむるにあらはれは、侍従中なれと、その中と侍従よ、中といふ
きよき侍、又申れ、ちうと、いふに、侍、群書類聚を伝と、植松茂
岳うらうらと、これこそを、あつて、たのづからしむると、あつて、この注
釈を、いふに、なすか、はれと、たのづからしむると、あつて、たのづからしむ
と、あつて、たのづからしむると、いふに、せん、まじり、この日記、源氏物語を、たのづからしむ
と、あつて、たのづからしむると、いふに、せん、まじり、この日記、源氏物語を、たのづからしむ
と、あつて、たのづからしむると、いふに、せん、まじり、この日記、源氏物語を、たのづからしむ
と、あつて、たのづからしむると、いふに、せん、まじり、この日記、源氏物語を、たのづからしむ

た。元の備めんはたのむにともなふ

○注釈には中々にさくくして候へり。今此信理亦款して此は
よきなくともかたきたしは。すて信理亦款して此は。たのむにて
書取ところ。此款をうとさへし。信を款して此取ところをうとさへし。信
理亦此取は。たのむにともなふ。此は。中り此信亦此取。なほに信
理亦此取を候と。さへは。たのむにともなふ。又あへたのむにともなふ。
是に。いさくしとけをうとさへし。たのむにともなふ。此取の。名や
すう。んたあともなふ。あさき

○源氏物語五十四帖は。信と云ふは。さうなる上り。あれを。ちりは。たの
むに引く。此取にともなふ。たのむにともなふ。あけり

○官をたのむは。信。その人たのむにともなふ。なほ。よく候。中り。たのむ
と。群書類聚中。たのむと。いふ。と。さうと。名。申候とは。その。その。事。に
出。此。外。信。注。中。にて。たのむ。は。此。注。款。は。省。きて。い。は。し。候。と。
此。官。位。乃。は。信。注。中。の。末。末。裁。た。る。を。さ。へし。又。注。款。中。ち。信。注。中
を。信。存。群。書。類。聚。中。を。款。中。字。中。の。中。を。一。字。と。の。さ。け。か

○此。注。考。は。系。系。は。信。注。中。に。たのむ。に。たのむ。たのむ。これ。安。友。為。意。
此。業。家。七。論。を。候。を。信。注。中。に。たのむ。に。たのむ。は。今。抄。と。同。し。
此。安。友。は。此。今。抄。中。に。あ。れ。は。又。業。と。い。は。し。候。ひ。一。名。の。中。を。は。信。注。
物。取。の。法。状。と。此。の。様。を。と。い。は。し。候。は。さ。う。く。し。は。い。は。し。候。と。た。の。む。
中。候。中。は。注。款。中。に。あ。れ。は。さ。う。く。し。は。い。は。し。候。と。文。の。意。に。あ。り。

紫式部日記秋一の巻

秋は早きは乃きは海ふる古津門屋のありき海はふん
たぬくむり

これは六十六代一條帝は寛弘五年此ことありきはこの九月後一
條帝の御礼をせ給ふてはまたむへし日本記畧寛弘五年
九月十日戊辰の時に中宮於左大臣土御門弟御産皇子也
親王と名くこの頃は紫花物語百紙抄なりといふにたづねふに
也秋は早きは乃きは海ふる古津門屋のありき海はふん
たぬくむり

かり。されはげえ氣なれとも。幸をひとひはたふ。氣とひよとはまこ
んを賣ぬり。すてえぬにふひつねれ。古文をくちみてささへし。
さて。上東門庭は。この次の中所名彰子。此へし。不ろさせ。清ひ
てのち。上東門院とさ。さ。にの清父の。道長
大は。此の家なり。日本記畧。百鍊抄など。に。上東門第とあり。けりをうへは。ねも。ち。さ。と。ぬ。の。今
つきは。ふ。ふ。み。て。ふ。さ。を。と。ま。で。ぬ。り。このこと。おつ。つ。ぬ。ぬ。田中。道磨。う。ほ
む。ぬ。う。た。え。ぬ。り。一。笑。ふ。う。た。え。き。う。り。なり。と。ぬ。へ。を。さ。つ。つ。う。も。う。人。な
ひ。て。ら。一。と。ぬ。え。れ。た。ま。と。この。ま。は。稱美ホムルと。可笑ワラフと。ふ。た。ふ。ふ。さ。なり。て。可。な
は。ふ。つ。ま。と。き。う。り。なり。と。師。の。ぬ。え。れ。た。る。に。う。り。て。い。ぬ。は。ぬ。つ。く。む。く。を
ら。一。と。う。け。り。な。ほ。石。原。正。明。は。蛭。蛉。日。記。なる。ぬ。ら。に。つ。一。此。を。う。り
ら。ぬ。一。と。ぬ。ふ。奇。に。つ。つ。て。稱美の。う。た。と。き。の。う。な。り。と。ぬ。へ。り。一。ら

一。つ。き。入。り。た。る。う。に。本。林。和。基。は。曾。丹。集。なる。け。は。さ。と。け。る。む
松。の。ま。れ。を。さ。さ。わ。れ。と。き。う。り。と。さ。う。て。な。む。れ。と。い。つ。を。ひ。き。て。は
む。と。さ。ら。う。と。ふ。う。の。う。ら。に。ま。る。ゆ。う。一。と。な。ま。は。さ。れ。よ。つ。て。こ
ま。ぶ。ら。ぬ。の。流。は。あ。や。ゆ。り。な。へ。一
池。乃。と。た。り。の。こ。は。え。と。ま。や。で。水。の。ほ。ら。う。の。ま。む。り。た。の。う。づ。い。ち。つ
さ。と。だ。り。つ。お。ほ。さ。の。ま。と。え。ん艶なる。に。ぬ。て。ま。や。さ。ぬ。て。ふ。だ。ん。の。ぬ。ど讀
さ。や。う。の。ま。く。あ。さ。れ。ま。う。り。な。り
庭。の。う。ら。の。あ。う。さ。ぬ。を。う。お。の。ま。え。地。を。う。り。に。ま。ら。う。う。の。う。の。ま。に
の。ま。も。れ。す。る。と。ま。い。へ。う。お。の。ぬ。根。に。ぬ。く。さ。ぬ。く。に。よ。ら。さ。な。う。と。あ
ま。ぶ。さ。ん。の。不。断。と。な。だ。ぬ。の。ま。を。う。り。ま。さ。秋。の。ま。う。つ。さ。ま。む。の。ま。を。

えんたる中にゆきさやうまひ・まきほにうたれたる後程の声をきく
うしあされしものともなり・不測の凶後後には中文字序姫方のほしとれ
は酒祈のためなり
やうくすーの風のうしあまのまきせぬ水のおとをひよひよ
らうてはうはき

やうくはやの音便よりのまきうたれたる・まきはとがしくニなり・まきのほ
イツモノなり・おのれの音をたれそ・よみのやう水の音をたれーやうくす
ーとせふにふくぬい音をたれつうう耳にまきうくたりぬれぬ
まほくうらうとまきをたれたるやう水の音にうてはうとる となり
きなり 観中とよに音をたれに・まきはまきのまきとるーとあてはと

とのえに

(中宮)
にまきとらうはまきふんこをたれおきうすまきとらうー
いなやまきうおまきうらまきまきうけなく・まきとらうせまきうけ
にまきとは中まきの水まきとらうまきうけなくやまきとらうに洞へまき
まきのまきはまきとらうまきまきまきまきまきまきまきのまきの下に
のまきとらうまきとらうまきとらうまきとらうまきとらうまきとらうまきとらう
まきとらうまきとらうまきとらうまきとらうまきとらうまきとらうまきとらうまきとらう
まきとらうまきとらうまきとらうまきとらうまきとらうまきとらうまきとらうまきとらうまきとらう
まきとらうまきとらうまきとらうまきとらうまきとらうまきとらうまきとらうまきとらうまきとらうまきとらう
まきとらうまきとらうまきとらうまきとらうまきとらうまきとらうまきとらうまきとらうまきとらうまきとらうまきとらうまきとらう

る。淳夜は実的なり。おんのはろく、浄土に不動。降三世軍荼利
大威徳。金剛夜叉等の法をうとる。これより新のたれなり。此の
ほろ七壇の法。百壇の法といふ。常花妙蓮に足たり。時は
しめつとえげむむの時。序。法をうめたるなり。（注）
然れども。うちあげたる法。うのうと。ほくちつくさ。よされたる
はとおとろくくくたふと。

おとろくくくく。法をす。僧とよのうの。おびたり。く。お申。うとる。

たふと。は。スミウアリガタイなり。と。玲本朗義いそれたり

親音院の僧正餘慶ひんくうのまふより。世人の伴僧をひきかて。加持

おとろく。あ。れと。渡。殿。おのり。の。と。ろく。と。ふみ。なり。は。は。は。は。

おとろく。の。まふ。い。は。おぬ

まふは。對。屋。なり。タイヤ。ここ。の。まふ。は。ま。を。さ。う。た。な。こ。へ。さ。ま。く。た

したる。後。の。橋。を。う。と。ろく。い。づ。を。は。を。ま。の。ま。を。う。ま。く。は。

ま。ま。と。他。の。事。の。ま。ふ。は。れ。だ。と。い。ふ。や。う。の。お。と。ろく。く。

たふと。と。い。ふ。僧。お。ま。ま。に。ひ。を。た。り

法住寺の庭主は。う。ほ。の。れ。と。る。ん。ち。の。僧。都。の。ま。ふ。を。に。う

ち。つ。れ。に。る。津。敷。す。こ。ま。て。申。お。く。し。き。う。さ。う。と。ま。を。さ。う。つ。

本。の。ほ。を。ま。け。て。ま。の。ほ。と。ま。ま。う。に。ま。ま。う。と。あ。ち。て。あ。え。れ

なり

院。主。親。中。の。情。意。に。院。源。と。い。ふ。文。友。を。ま。に。馬。場。庭。を。ま。

めて法任の字を馬場庵に庵らしの僧おえ文友をよにと
いつ言なりまをなとにえつりつへ帰れり。浄教は法衣なりするに
すてのまてえおれなり帰れり。又およにまはよを信れにまあり
うまひえりつえ帰れり。申志くーさえ。ニサイラキなり。うまひは
庵めさるる法衣の持なり。あまれい。とんふくく。めて感するよまあ
るわい。いとる。鶴子の戸なり。とんふくく。まは。おのち様をよとんふくく
さいさあさうと。大わたり。やまひて。あー。か。う。あ。う。う。
清禪 大威徳。右のふ壇のうちの一軒なり。このまをよとんふくく。この阿闍
梨の腰を屈めてれをな。ら。な。り
ん。こ。ま。わ。り。つ。れ。は。お。と。あ。け。ぬ

この人はまだ女官はいついばり。とある。女官とあて。おまの女官
まをな。と。この女の女官まの。おまのあつた。は。東のあけた。と。ま
ア。よ。う。の。つ。ま。し。は。お。か。持。の。信。よ。を。ま。つ。つ。な。れ。と。これ。を。あ。に。か
へ。り。つ。と。お。れ。を。あ。な。と。へ。入。ア。ー。と。お。れ。を。ま。つ。つ。は。お。ま。の。ま。つ。つ。と。ま。つ。つ。
わ。う。と。は。い。ま。つ。つ。と。ま。つ。つ。
また庵のやまのつり子にまのまは。ほのうらまうた。あー。た。の。あ。も
ま。お。ち。ぬ。小。屋。あ。り。を。信。ひ。て。ま。つ。つ。と。ん。ふ。く。く。て。や。ま。の。ま。つ。つ。を。ま
つ。つ。
局は。お。ち。ぬ。小。屋。の。ま。つ。つ。は。ホウワ。と。なる。七月。の。あ。り。た
の。ま。つ。つ。と。ま。つ。つ。と。ま。つ。つ。は。東の羽の。つ。つ。と。ま。つ。つ。と。ま。つ。つ。と。ま。つ。つ。

いこの甲の序文を、東之條為家公の子、序名道長世に、序堂、
白きに、山をくぐりて、

そこの山を、さきへ、いづうは、うなるを、枝を、せ、
几丁のさき、は、のさ、を、
は、の、さ、
け、す、の、め、ま、に、
け、す、の、め、ま、に、

そ、や、り、水、こ、も、なる、
の、さ、り、
へ、り、
冷、本、
冷、本、

ぬ、
お、
そ、
す、

を、
こ、
う、
ろ、
た、

あつはひいふかみ

うらふけぬはらむか度とまよふうらふちよけはよちさなはにて
らふに立派にふくみ屋のふいはま今葉秋、近小部、小野、良村。
まにいへおぼろむ時をにやうせはあやうあこのちをたたらん
あふまのむをまいけりまてうか度とまの平にたるおせはあやかと
ゆかたるあをやせよにたてりけんしゆかきをりよのたてり竹丸
つぼみ下種へのお渡書たへはうらむあはにんふんふんいふかみ
まなぬむをいふるのむかひはまのまなうらふてしゆかき
まにいふかきふかにてふかんいふあふんふんふんはふんふんはふん
とふんふんふんこのむかひ君のまほことぞいふかきてまうくほまふふん
とふんふんふん

らふんふんふんはふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん
まなぬむをいふるのむかひはまのまなうらふてしゆかき
まにいふかきふかにてふかんいふあふんふんふんはふんふんはふん
とふんふんふんこのむかひ君のまほことぞいふかきてまうくほまふふん
とふんふんふん

まらふのらむあのみけいばいけりあうらふらふらふらふらふらふ
まらふのらむあのみけいばいけりあうらふらふらふらふらふらふ
まらふのらむあのみけいばいけりあうらふらふらふらふらふらふ
まらふのらむあのみけいばいけりあうらふらふらふらふらふらふ

播磨守・察中の傍注・行成より、若の属と何とは、若にうちつけた
る人より、後におをひりて、人を召食應ずるといふなり。乙月の競馬
にはあつはひいふかき、文徳天皇實録・天安元年十月乙酉、右近衛、右兵衛、右

衛門三府並右馬寮等大設宴會貢献酬本五月六日競馬之
員也ナリ也ナリと云々このほろ三代實録貞觀四年十月四日貞觀六年十
月の條をよみては恒例十月にあそとそすナリ拾髮妝に
及たりナリ日本記畧應和二年八月廿日己巳々今日殿上侍
臣設和歌員態本五月庚申夜男女房献和歌男方員仍
所為也とありナリ前よりけりナリ辨ハカまにけりナリ右をけりナリ言は
りありて中をけりナリ後へナリいりてナリかひのさなるひ
りりことありけりナリさるナリあくナリりてナリ係のいとねらめりてナリ文
をいりてナリせげりナリとありは顔ナリさナリだのナリまけナリはナリさナリりナリこれにナリをナリせナリり
へて其の員態のナリまナリをナリせナリりナリまナリをナリせナリりナリけりナリ日

うりそめに。祇屋亭へゆきて。そらそこのちに。うりかうそ。そらり
乃。奏歌のまゆかき。すけし。とあり。ありさるゆい。うりせりあり。まひと
之は。つゆ妝に。札のほろ。又。月妝ナリに。まのま
なり。まのまの。すけりナリすナリてナリその用い。おせ盛ナリ水ナリの。まのま。
す。ゆと。同ナリく。おせ。我ナリる。札ナリして。形の。ゆいナリなり。す。ゆら
け。な。す。へナリ。今ナリまナリまナリとナリあり。まナリれナリかナリりナリの。おせ。造ナリりナリて。飾ナリは。は
かナリこナリの。まナリまナリありナリたりナリ。まナリゆいナリなりナリたりナリけりナリとナリあり
に。まナリゆいナリの。まナリまナリゆいナリなりナリたりナリ。まナリゆいナリの。まナリゆいナリなりナリたりナリ
まナリゆいナリの。まナリゆいナリの。まナリゆいナリなりナリたりナリ。まナリゆいナリの。まナリゆいナリなりナリたりナリ
まナリゆいナリの。まナリゆいナリの。まナリゆいナリなりナリたりナリ。まナリゆいナリの。まナリゆいナリなりナリたりナリ

はらとせらるるらんたらをば。後河あさひ。いさしうたさ。をあ
とせなす。い。らん。一。誰。よ。を。う。と。あ。う。ら。れ。う。た。う。ん。は。て。刀。祢
と。う。う。と。は。古。事。記。傳。傳。三。に。妻。う。を。た。う。この。ほ。う。葛。盛。集。に。旅。人
い。う。あ。ひ。た。ぬ。に。人。あ。ひ。う。旅。人。は。す。ま。を。け。こ。を。む。を。一。ま。を。ま。や
と。い。う。一。杯。の。め。と。も。は。ち。と。も。を。た。う。後。の。考。へ。を。ま。う。勝。云。く。今。世。に
名。を。た。え。と。う。と。の。い。名。を。と。抗。と。う。う。と。の。め。さ。ひ。を。う。これ。え。め。の。ま。ま
い。う。と。れ。に。た。ま。を。と。う。と。れ。と。ま。古。書。の。と。名。を。た。え。と。あ。ん。お。は。い。う
か。う。と。と。と。あ。う。え。う。と。う。へ。一。これ。お。か。せ。う。て。と。は。大。さ。か。り。や。う
た。ま。れ。乃。あ。さ。い。は。を。へ。と。と。を。れ。う。い。海。を。う。奇。い。今。旅。を。と
同。一。ん。を。一。ち。を。く。い。と。う。た。う。一。様。う。奇。な。う。そ。奇。は。そ。あ。う。り。七。五。

七五とつ。ま。て。平。家。お。初。と。う。う。事。あ。さ。う。ん。た。う。た。と。く。い。フ。エ。テ。ト
な。う。

齊信卿 實成卿 濟政
あ。ま。ま。な。う。の。い。な。事。お。中。お。初。房。名。清。盛。み。の。お。初。な。う。海。を。な。う。て
あ。初。の。い。な。事。を。あ。う。

あ。ま。ま。い。中。ま。あ。ま。な。う。左。幸。お。中。お。は。左。色。中。お。そ。い。幸。お。を。う。け。ま
う。か。い。い。い。え。幸。お。に。左。右。は。あ。う。ま。ま。は。い。幸。お。を。中。お。と。う。へ。と。と。う
な。う。を。う。と。い。い。い。幸。お。に。左。右。人。と。し。ち。を。お。監。う。け。た。を。あ。ま。う。旅。人。の
お。う。後。世。に。に。西。位。下。の。お。階。一。た。を。西。位。の。西。下。ま。て。の。ほ。う。一。ま。を
い。と。と。同。く。い。れ。の。こ。う。の。を。う。と。ま。ま。海。な。う。み。の。お。初。い。美。濃。守。に
て。お。初。を。け。た。を。い。ふ。な。う。一。な。う。て。い。この。人。と。を。マ。イ。テ。に。て。道。

長公の拙い活字なり。 経房。 野中にも。 傍中にも。 公卿補任作経房。

下皆効之と云へり

と云ふの拙い活字は。 左におぼすや。 やあ。 んせはを活字に

と云ふの拙い活字は。 よはのなり。 あまひとあまひ。 まし。 きたり。 たの拙い活字

と云ふの拙い活字は。 なる。 のなり。 たえ。 おし。 おと。 け。 ま。 け。 ま。 け。 ま。

と云ふの拙い活字は。 なる。 のなり。 たえ。 おし。 おと。 け。 ま。 け。 ま。

は。 なる。 のなり。 たえ。 おし。 おと。 け。 ま。 け。 ま。 け。 ま。 け。 ま。

は。 なる。 のなり。 たえ。 おし。 おと。 け。 ま。 け。 ま。 け。 ま。 け。 ま。

は。 なる。 のなり。 たえ。 おし。 おと。 け。 ま。 け。 ま。 け。 ま。 け。 ま。

は。 なる。 のなり。 たえ。 おし。 おと。 け。 ま。 け。 ま。 け。 ま。 け。 ま。

野中本による

大正の拙い活字は。 なる。 のなり。 たえ。 おし。 おと。 け。 ま。 け。 ま。 け。 ま。 け。 ま。

は。 なる。 のなり。 たえ。 おし。 おと。 け。 ま。 け。 ま。 け。 ま。 け。 ま。

この本に。 墨お金の。 なる。 のなり。 たえ。 おし。 おと。 け。 ま。 け。 ま。 け。 ま。 け。 ま。

う。 なる。 のなり。 たえ。 おし。 おと。 け。 ま。 け。 ま。 け。 ま。 け。 ま。

ま。 なる。 のなり。 たえ。 おし。 おと。 け。 ま。 け。 ま。 け。 ま。 け。 ま。

ま。 なる。 のなり。 たえ。 おし。 おと。 け。 ま。 け。 ま。 け。 ま。 け。 ま。

とら。 なる。 のなり。 たえ。 おし。 おと。 け。 ま。 け。 ま。 け。 ま。 け。 ま。

う。 なる。 のなり。 たえ。 おし。 おと。 け。 ま。 け。 ま。 け。 ま。 け。 ま。

この軍お君の局のめりなり。戸くらひを局のテ口なり。ひさし今より
と同一。これらは流しきりなき。またききききききききききききききききき
中夜の子をなへし。心正れば下りナラヌなり。らうたげをカハユラ
ゲナリ。かあり。清平語なり。今野中による。

後より見る。おの姫君のうちすれは。ちちおほひをいさやうして。おのうだうの
おのらちち。後へる。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。
なく。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。
へる。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。
た。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。

すよ。袖を口には愛ひたるなり。べら。口愛ひたるなり。おのらちち。
ら。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。
おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。
一腹なり。

おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。
おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。
おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。
おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。おのらちち。

とにひきかへしけりしは、
よき世のまじりしは、
り。とていふは、
中、かうするは、
いふも、
位と、
いとほしう。

中、
いふ、
いふ、
いふ、

いふ、
着、
各、
一、
た、
日、
日、
お、
い、

よきにつけあそびをなすまじしをなすべし。されば行力をめて、より尚
とくしむるふ駈らうして、皇の御心くさしむるをたす。これくつと
葵、まゝ葵と、西宮の本に奉りて、名をたす。この日の書とよきは、まじく
と申すことなれど、今、世はまじくしてなすことなす。

月ころ、さうりまうひつ。とくちのさうりをは、まじくして、いかに、ふと、寺
こやたつて、まじくして、いかに、ふと、寺
いかに、まじく、まじくと、いかに、ふと、寺
あつて、まじく、まじくと、いかに、ふと、寺
この月、ころ、まじく、まじくと、いかに、ふと、寺
か、おなす、て、功、験、あつ、まじく、まじくと、いかに、ふと、寺

いかに、まじく、まじくと、いかに、ふと、寺
八百、まじく、まじくと、いかに、ふと、寺
稜の、辞、に、高、天、原、か、耳、振、立、聞、物、止、馬、牽、立、まじくと、いかに、ふと、寺
け、まじくと、いかに、ふと、寺
に、まじくと、いかに、ふと、寺
まじくと、いかに、ふと、寺
まじくと、いかに、ふと、寺
まじくと、いかに、ふと、寺

いかに、まじく、まじくと、いかに、ふと、寺
まじくと、いかに、ふと、寺
まじくと、いかに、ふと、寺
まじくと、いかに、ふと、寺

本丁をたてつゝまじりてあつてくはしむる

うちの女房は内裏の女房なり。うづたたくはすれをよき御一
ひとまひひ一雙なり。うづの一人を一雙ひきつひきたる屏風の
にまじりてその引つひきたる口には、七ツを建たるぬくあつてくはしむる
一とよか一人づ、各あつたつ僧とて

こゝろにえかむとゆき僧正僧都。ききなりわてふごうきん乃いさか
うたらをよひひきあつてくはしむるたのきううづ。丁あつたつぬく
にたつていづうきん申

かむとゆきは下あつたつ。ヨウイナマとくよきいぞはよひいづ一な
りたのきううづたつぬく。あつたつぬく。あつたつぬく。あつたつぬく。あつたつぬく。

因一この法勝ともの法名勸の形をとあつてくはしむるかのうづ。か
持てあつたつぬく。たのきううづ。数年又平にま

い乃いづう一とあつたつぬく。あつたつぬく。あつたつぬく。あつたつぬく。あつたつぬく。
これにかつて

以曹司は此局なり。まほいせを同する。このあつたつぬく。あつたつぬく。あつたつぬく。
れてんつあつて。あつたつぬく。あつたつぬく。あつたつぬく。あつたつぬく。
十余人あつたつ

あつたつぬく。あつたつぬく。あつたつぬく。あつたつぬく。あつたつぬく。あつたつぬく。
あつたつぬく。あつたつぬく。あつたつぬく。あつたつぬく。あつたつぬく。あつたつぬく。
あつたつぬく。あつたつぬく。あつたつぬく。あつたつぬく。あつたつぬく。あつたつぬく。
あつたつぬく。あつたつぬく。あつたつぬく。あつたつぬく。あつたつぬく。あつたつぬく。

たつはまをり

いたるにをうちかきいり香のまにゆくらまねたしほれたるぬの
いふえとさうえんとのちゆををりさ

いたるはつひたるとの頂をうちまよひ散米をり

かきまのれに米をいやくうちまね

と後のはいはて中庭室にうちまよひしつるとい肺を中昔の流うぶやにう

ちまねするとい後陽脈のなほまほしてあをうちまよひ邪鬼おそれ

てあうそくぬぞはするいあさきものほまうぬくさの平あをんとを

おひてぬりさねおんすーとせせにあらぬりぬーあつめとあつその

ねんすーのまへのうちまねたをり香のまにゆくらまねたしほれたるぬの

つよくおほるぬお身をまねつるにぬつるてさげくうちまよひはをり

おんすーのなほはつるうとくけりといまねたりねねの香葉にん

ーそのせりい可笑このをりなり うちまねの敷平にま

いいたるのぬとーおろーさういむとけさまらぬほとぬをひ

たさちにはぬりたるいあはゆうぬーにたひつにせはをほ

ひてのちれとぬーいほとほさういしつるまやの事のははーさう

らんのはまよてたちこみたつ傍をきくさいぬいとさうとよみてぬを

はく

いむとさうけさい受戒をり戒をうけさまらぬほとぬをひ

おろーおろまをほよさう下着兼きに紫上のなまをほよとこふぬ

くーおろーとせらにおほーなまいむとらちつにまよていいた

よむりつたて

幸お君のうほろもく一ほはほまをく我れとつうたけり一うほ
ていふなりけんましとそのはおえ一人乃んあうまのうたえおほえ
はまーなんーこまー

幸お君のうほれとこ中おとねをくすなをせいふとつうたえおほ
まにそなきんをれせん一ていぬりえとはらうくのこまーこの
こ中お幸お君をたふかう中師て我身はいまうくえはそえくほー
うつうんとくまなうそのまけそあひとんえうーんえふゆら
ひのまなううたええたがひかーうーこまーこまてはイチダシノデキ
こテアリしといふまなう 難中んまがれそほいふまなう

いまとせはせはよほはまのまの秘しとけーくまをものむくつけは

2

幸おせはせは上にのまれとほー一たよとあうまを尾おて胞おのおく
かーむくつけーいおろーくおをひていこむまのあつたを

けん源のそく人はまよあづるま場のうく人は持まそとく人右をり
く人おはほららーのまーまおほのつほおはらららあうまを
つけたまはまおまにひたふましていとほらううたれえ孫ん
くあはりまめーくまてそまー

源花人ま湯花人右ま花人ま内わいつれとよまゆーにまたな女
まうまよまらまら孫んうくいつれま加わの備のまをうほら

なうしつとをいふはてこのあやうお申すうのこもさうけく

れかたうとに

うめるとれおをいふおはは一もしたるさちたひつらにおし
にうれ一はのたひとをさきにむとにはたをう備一けらよろこひ
うはなのみなうん

十百の午の時をいふおははていふくおひをけきたらはをとたひくお
そ一備したれえい人んおちわたさむさうたうそのあまはて朝日此
は一もたうさうちすといふさう。倍よカアケタヤウナといふんまう。
増養うちおに。後後儀奉れ申すせはつたはひつ一のさう
はとふすてにさうぬさうのいせうと公相お納え申す候生さやと
いと

あこやうにのむよをさくんのさち車のあけたらんやうといふ

さゆさうをよきにうこれりお十八代の帝にて清諦敦成

長祿二年四月のさうをいふ
これ以後一條帝と一まは

吹の音をいふ。けこのはとあはさうにむられつ女房をいふ
ちあがれつやすむはさうらちひたうんはつさうふ一いふく

一にさうとに

朝霧におほれつといふたの文のあやを。おほれつはウロクシ
タルを。たちあうれは退かなく。うさうふ一いふさうほせいふつ
まく一さはニアハシキを。おほれ 備中候。今敷かほす。
度ま一人もあやにさうさうて月ころさげほりどもうにはさうい

儀式九月十日奉伊勢太神宮幣一儀に即日使等從神祇官發
向廿日使等就内侍復命なまあるを乞ふ一貞觀儀式に亦日々
復命とあれば呼ばはまはしく古のなり式部のおとどひたりて
けらにやまの所いづれと云ふものなるに及ぶもの云ふをこの日此の
つす人乃れとせざるをへしと云ふたり。其の神事によつて身室の
禰をさうして度つと罪をさうと云ふ序使のありたり。又してけ
らいさところありとも云ふはけりぬゆなり。延喜神祇式に凡
甲處有穢し入其處謂着座乙及同處人皆為穢云々云々
拾遺抄に公賢問曰云々明成宿禰答曰穢物見在之時入來之
仁可為甲但不及着座飲食聞穢由即退出者不可為穢乎。

かゝるたゞしてさへ

此は擗のをほとこの心らつて。穢三位つる子ぬめのと。れよりさうい
かつこうふたとして。大さあゆみのねとつうしあつる

祖母の倫子のぬめ結さうけつたういづは扱扱あて文を。花屋を
なにも。祖母なる人のさうけつたういづ申ぬめのと。さういづる係
り。ぬめよりさういづは。この中まのぬめは。或は道長公のぬめにさ
あふなるは。さういづむさういづぬめさういづやうして。ぬめをぬめ
ぬめにせさせさういづ。つる子。侍中に。清堂殿能作。徳子。下皆効之。
と云り

海中ちむ子とれ入朝長ぬめさういづる人のぬめのと

これに人々の乳母あり

御湯殿は室子に御湯ありせむことにて七つのおひた朝と夕と二日に五
あふきたうしききて御湯をわ

夜つあ儀式なり御産部類に御湯殿は西の御室夕の御湯殿なりたうじ
にくはし

ことば衣取令の義解によれえ位階おぬれ取色を以てなれりことば
ふやの御室夕御湯殿にたうじ白きをたうじことばひて二種乃

多ることをいふかえし御産部類源礼に廿九日云々始御湯殿云々貞

仲并自餘廳官各着當色以白袍着例衣云々同書源礼云史生属

代佐伯貞仲云々六人皆着束帯白重上着當色白生云々同書源

に廳官等着當色運御湯殿物具以白絹袍着例袍之上なとある
をいれ白絹の袍なり

抄の補をけす臺たなをいれ一ろさおほひたり藤近光をたうじのろさちろさ

まのはろさひめをばなる長源仲信たうじてみすめをばなる御厨子二ろさこれ令

婦ろさほとつそろめり女房二人おほそくろさそとたうじて御湯殿
十六おほれえろさ

ちろさなるのろさと御湯殿の儀式おほ仕するさほなりちろさ熱湯

にろさろさほと水を含みして今いを同い去ほとれおほ瓶のたろさ

さたろに承りたり十六御湯殿にろさろさほとれろさほとれにろさ十六の御
湯殿なり御産部類源礼に其南北瓦基二脚居瓦十六口なと見え

秘抄に九禁中着湯卷上鴈一人典侍一人也。是候御湯殿故也。な
とそたり

まは度しきまう給ひて。いそり。こ少ね表。とりのうら。まのなれ。い
まて。いそれにまわ

まの若まを。とりのうら。造つた。虎の尻を。虎は。子は。たけ

くこそ。黙かれは。千をひを。ためを。御産部類源礼に。皇子。令

渡御浴殿給。御匣殿持。犀角虎頭犀角と虎頭と。二種なり

さぬ。い。の。は。は。を。た。は。す。す。に。た。し
り。こ。は。う。は。を。ぬ。ひ。う

すの。の。松の。実を。入。海船は。必。好。小。大。見。を。を。

りた。文。と。あり。前。後。を。は。と。あ。と。の。を。大。海。の。す。め。と。ハ。織

た。海。船。を。と。の。を。て。す。た。た。備。上。え。せ。た。を。い。う。こ。ハ。裳。の。腰。に。て。

羅。に。度。量。を。備。た。つ。た。こ。れ。ま。の。な。れ。の。き。な。り

少。ね。表。は。林。の。草。村。て。い。と。う。な。と。を。ま。る。て。は。く。う。ま。う。

たり。ね。の。は。う。う。あ。て。人。の。不。志。く。い。や。う。な。け。ま。ハ。こ。い。う。を。
ま。に。た。う。な。め。り

小。少。ね。表。の。ふ。を。脱。ぎ。う。又。有。ま。を。い。へ。織。お。は。後。よ。う。と。い。ま。

ま。た。扱。て。ま。信。あ。ま。れ。は。結。さ。れ。は。な。う。さ。れ。え。う。あ。り。て。と。い。

り。人。の。ふ。ま。と。は。限。り。あ。る。扱。な。れ。を。我。ら。の。扱。お。は。う。さ。れ。え。な。り。

昨。き。て。い。と。う。と。い。と。井。若。の。う。な。文。ふ。こ。れ。う。れ。と。な。た。を。蝶。と。ま。と。

かりと人のあはれとまうにそあはれとまうのまうのまう
あつてとあはれとまうのまうのまうのまうのまうのまう
にうける文をてこれは中若乃信候なるを信とくはあはれとまう
かおるまうのまうのまうのまうのまうのまうのまうのまう
とひくまをのまうのまうのまうのまうのまうのまうのまう
まをればまをたうまうのまうのまうのまうのまうのまう
蒙のまをのまをひたうまうのまをのまをのまをのまを
度のまならふたところ源少雅通をうまをのまをのまをのま
たうのまをのまをのまをのまをのまをのまをのまをのま
ひたうのまをのまをのまをのまをのまをのまをのまをのま

ふたところ蒙のまをのまをのまをのまをのまをのまをのま
陽のまをのまをのまをのまをのまをのまをのまをのま
此のまをのまをのまをのまをのまをのまをのまをのま
まをのまをのまをのまをのまをのまをのまをのまをのま
文とむを^{博士}人あはれなるがらんをまをのまをのまをのま
人あはれなるがらんをまをのまをのまをのまをのまをのま
まをのまをのまをのまをのまをのまをのまをのまをのま
御産部類^註に卅日乙亥^マ藏人并^讀史記五帝本紀進
自本例一二尺許^黃帝者少典之子姓公孫名曰軒轅生而神靈
弱而能言幼而侑齊長而敦敏成而聰明治五氣藝五種撫一方
民諸候咸尊軒轅為天子^三讀之^遍とそなりこの文のまをのまをのま

はるりに織物とを思ふ事なり。うらゝくも。ダレガシテタビクキツトシタル
とらふ事なり。たは。お。く。お。す。た。た。ん。お。い。ふ。う。て。お。い。は。に。は。
申さぬ人。お。ま。し。た。ま。は。な。り。た。い。ふ。さ。し。た。い。は。お。い。は。は。せ。て。た。え。
す。ぬ。ま。い。の。う。ら。ま。に。う。さ。た。た。り。め。む。さ。ん。の。い。ま。ぬ。す。く。ま。ら。
て。は。お。い。は。は。あ。や。う。ま。い。の。ま。い。た。ん。を。あ。り

を。結。ぶ。た。い。う。ぬ。く。そ。ん。を。さ。に。い。ま。結。ま。ぬ。を。た。ま。ひ。た。
ハ。強。く。に。さ。く。く。月。に。た。り。は。う。の。お。す。た。え。せ。た。た。お。い。く。え。
す。ぬ。ま。い。の。結。ぶ。ま。し。た。ま。を。思。ふ。事。な。り。た。ま。し。は。笑。止。す。キ。
ト。ク。チ。と。い。ふ。事。な。り。う。さ。た。た。り。ま。の。う。ら。申。す。ま。ぬ。と。い。ひ。て。織。物。と
い。は。は。た。う。や。な。れ。と。産。家。を。と。け。あ。れ。表。裏。に。思。ふ。は。割。外。な。り。

一。む。え。い。平。絹。を。り。す。く。ま。は。ぬ。ま。う。く。に。キ。ニ。と。る。意。ナ。キ。
た。ま。を。さ。く。く。ハ。お。い。は。い。し。く。は。お。い。は。を。い。ふ。た。ら。ぬ。へ。

あ。ま。さ。を。み。ぬ。に。え。た。ら。く。く。う。や。う。さ。し。す。な。う。ぬ。ま。ぬ。に。た。り。ん。
ま。あ。る。申。文。う。ち。う。さ。な。と。て。い。ひ。あ。ま。せ。た。う。な。ま。を。ん。と。い。ひ。り。
と。ま。よ。ま。い。の。ほ。と。た。か。い。ま。ら。の。は。を。う。と。え。り。ま。り。た。り。ん。の。の。お。い。
た。ら。ぬ。ま。い。さ。ま。あ。り。ま。に。え。え。け。

麻。を。海。と。あ。の。表。の。う。海。と。申。ふ。事。な。り。ぬ。ま。い。の。あ。ま。を。り。ん。ま。あ。る。は。キ。
モ。チ。ノ。アル。を。り。申。文。は。信。文。を。り。す。ま。い。え。幸。齡。を。り。た。か。い。ま。ら。
ハ。事。本。ま。に。こ。れ。は。二。の。ま。ら。の。ん。や。ま。い。た。な。り。と。あ。る。二。の。ま。ら。ハ。次。
乃。方。な。り。産。本。ま。に。こ。れ。は。も。ち。ま。い。と。い。ふ。事。な。り。上。の。ま。ら。ハ。上。の。

言なり。きいせねが。一。ち。一。中。一。方。めて。幸。齡。の。同。等。を。ま。む。く。を。う。し。
い。あ。せ。て。は。は。か。ぬ。一。は。ま。の。い。ひ。合。せ。て。一。た。ま。を。ま。む。く。を。う。し。
ひ。合。せ。た。る。あ。せ。て。人。の。い。ま。う。と。い。ひ。一。と。う。く。す。し。ひ。て。え。
れ。は。程。同。一。や。な。か。文。な。る。れ。も。ま。を。幸。齡。の。同。等。か。う。と。ち。は。
う。た。ま。に。を。う。と。え。さ。う。一。た。う。と。な。り。人。の。い。ま。う。と。い。ひ。と。は。こ。の。人。と
の。う。た。ま。に。お。す。れ。一。さ。海。の。い。れ。ぬ。く。い。一。一。な。ん。ふ。あ。う。そ。れ。を。申。と
な。り。み。め。数。千。千。に。よ。り。

と。い。ふ。あ。の。ぬ。ひ。の。と。は。は。こ。と。も。て。袖。ち。に。お。さ。ん。ち。さ。い。一。ま。い。ぬ。ひ。め
に。さ。う。う。め。の。と。を。ま。む。く。と。い。ひ。や。う。に。一。さ。を。ま。む。く。は。う。て。あ。や。の。ま。ん。に。よ。ま。あ
ら。う。と。の。さ。海。を。は。た。雷。ふ。う。れ。の。を。月。の。あ。ら。た。に。ま。む。く。一。た。ま。を。う。し。

つ。ま。う。と。ま。む。く。と。う。な。ま。む。く。は。れ。ほ。あ。み。を。け。た。ま。を。う。し。
は。ま。を。て。は。い。ふ。ま。に。は。あ。う。ま。は。ソ。レ。ハ。レ。ミ。テ。カ。イ。テ。と。い。ひ。を。ま。む。く。一。た。ま
を。う。し。今。フ。ク。リ。と。い。ひ。の。な。の。さ。海。や。あ。ら。ぬ。へ。一。あ。ら。ぬ。の。い。ハ。銀。糸
か。う。と。ハ。組。な。り。ま。く。ハ。箔。な。り。後。の。文。お。筋。を。わ。け。る。な。り。一。お。ま。と。の
さ。海。こ。れ。は。あ。の。筋。さ。海。と。は。と。も。て。海。を。ま。む。く。と。う。な。ま。む。く。一。や。う。一。た。ま。を。い。ふ。を
え。一。あ。ら。ぬ。と。を。け。た。ま。を。う。し。一。は。筋。の。さ。海。を。い。ふ。を。う。し。一。ま。む。く
く。と。の。下。に。一。て。と。う。な。ま。む。く。と。い。ひ。一。ま。む。く。と。は。ソ。レ。ハ。レ。ミ。カ。ト。モ。な。り。
ま。む。く。に。い。は。あ。の。な。を。ひ。た。と。い。は。う。ひ。て。あ。ら。ぬ。ま。む。く。の。い。ま。う。と。い
て。う。や。う。一。た。ま。を。う。し。

三百にかなせ給ふ君はまづは。ち。ま。ま。よ。う。そ。一。め。し。は。う。や。一。な。ひ。一。さ。海

齊信卿

色ふしにちちうにたるとし
 主殿
 とのきりうたりまじりたまはしむおこぼりにひまのすなるにうりこり
 いえうれ本のそとこにうちむりてをうよまのの隨身ふんをうのま
 とまはおのちちうたらふらうはせ中の光りの心でたそし
 たるとせうげふつーととせういしおよひほふしせうろにうち
 こつちよけなるや

主殿は度中の一をとりまをう官人せとと一火のうま等のとを
 せ司の職なれば火をぬきてたを職につきてひるのやうなりとぬへり
 へにえたりをうの度身へ係れり世中の光りの皇子清誕生のことなり
 げにえうちくにたるとし一まの皇子なみのせれまをうへりかたを

に度身とせうてうちくにおひまうしと今かくまをせれとせ
 いてはしうおひしよのたひ影ふせうこつちよけありとなりと
 ろは伊勢お徳ふすろなるをえりてとよにとあるを源の影お徳を
 ありとせうてえといふとてと大お徳ふすろなるをせれふにうまのわ
 ぼくたまえんよふとせはせのゆとせれにとをいよくうとといえ
 れたにすはせうにせうの度身をまののせれはせのゆとせれ
 おひしよのおよひ影にせうのまをうせうろとせうとせうとせうの
 いらかしくに術なるへ

して度のうちれ人はかたえうのうすにしとあぬむとせなととそ
 こはうとぬくこしとちちうあてりちちうひつせうけなぬさゆととせ

二つは平のよきとちたなををりさるる人のうたりにてはしむるつ
 つおとなりたしつとらふひしやゆりしつまふをおよのほかるとそふ
 あるとせす候をさうとてさうぬしんをさへせ給へしを
 んうしつとらぬをたんと申し給てえたりし
 ころあつたふ衣の後武のハカニキをうけはらうたはらぬさへを
 えつて信膳の役を勤めさせ給へしつとらぬしつこの信膳の役は
 えつて給上しなむとせ給へしつとらぬしつとらぬしつとらぬしつ
 してんうしつとらぬしつとらぬしつとらぬしつとらぬしつ
 ね丁のひんうおとて二浦をうりにせよ人おなみたま一人のまよひと
 せえおなまういざのれまのう米女さふとらぬしつとらぬしつとらぬしつ

ねへきてこれいひつとらぬしつとらぬしつとらぬしつとらぬしつとらぬしつ
 にまかりせえしつ
 又おはるにらうひあるをいへ威儀序膳いふ東にあつとせし序
 給ふ妻しつとらぬしつとらぬしつとらぬしつとらぬしつとらぬしつ
 の序膳をいへしつとらぬしつとらぬしつとらぬしつとらぬしつとらぬしつ
 ぬふる浦に月をら浦をたにう司ぬしつとらぬしつとらぬしつとらぬしつとらぬしつ
 ん司とらぬしつとらぬしつとらぬしつとらぬしつとらぬしつとらぬしつ
 ころしつとらぬしつとらぬしつとらぬしつとらぬしつとらぬしつとらぬしつ
 六年正月十九日祿法女官祿内侍所去々理髪六人各六丈 緋二尺
 去々とらぬしつとらぬしつとらぬしつとらぬしつとらぬしつとらぬしつ

にてわあつめつぎなをうと冷本をいさけり

開司

こつとつはなをアのぬれふやあしんおろそくにけりきさけさういづれ

著

とろのえんはしきさふくしきさふくしてえんひんしきさたさう

れやららしていさそをくれこきてかたしんをえとほりうよえに

ねろそらにえあのお房たちのいさけけけけけけけけけけけけけけけ

けけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ

ねろのえんしきさたさふくの儀式たちでまたうしきさふくぬをいさ寝ぬ

は河海抄に書家の居不きとてり 情がびんうの廊とに今数

一平なまに

おとのよかりてくお房とほのむにゆてたりほけけけけけけけけけけ

海沖にきおほしきふれおのぬ袋うきぬをいほ山のこ松をい

いたさふくをうしきさふくしきさふくしきさふくしきさふくしき

大武記の石名堂吉の官名あてこれ度の内に近江の女房なり

たのよれ余輝いさぬいておれにをぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

やにぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

さばやうなぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

いものにならざるはあゝそきなとらりよまひの泥の香りと
糸のねとにやめて思ふなりとくはりのうたとくまきあてはまのつ
たやうぬをぬり

かねのねとよいふはおとくをさうまのまをひとくつさう
あねのねとよいふをさうまのまをひとくつさうとくまきあて

そくは筋をさうまのまをひとくつさうとくまきあて
もれつさうまのまをひとくつさうとくまきあて

この庭の間にまはの女房なり

ろのねの四つあうき屋のいとくふえせ海はくまきあてのまをひ
いひすふをぬりあけてこのせにさうまのまをひとくつさうとくまきあて

ゆりくはあをうくくとおれんをはなしててをばりすうてまよう
こひゆり

板居の傍花を銀帳によかの傍に二間に依するなりはおれんのことなり

とありこのせにははまの極楽をまきあてたさうまのまをひとくつさうとくまきあて

それはさうまのまをひとくつさうとくまきあてたさうまのまをひとくつさうとくまきあて

そははまのゆりくはあをうくくとおれんをはなしててをばりすうてまよう

ふあをうこのあなを熟きの声なりうこはオリオライモウタイナイとい

ふまきあておれんは我がおれんをばらばらおきておれんのまをひとくつさうとくまきあて

うんたちめをたらしおれんのまをひとくつさうとくまきあておれんのまをひとくつさうとくまきあて

いと白き花に月をひらきあひたすたふたはとをうしとすか

白き花に月をひらきあひたすたふたはとをうしとすか

る如房とまは花にたてるをうしとすか

水のちんにる花あまのつゆはうしとすか

にて信長命婦、若少将命婦、うしとの命婦、左を命婦、右を命婦、

婦をとま、びん、信りし、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、

ふきの人こそまよひなりぬ、度ぞかたひて、おぼに下ぬき、

てまよひたまふ水、流し、た、う、物ともあましくは流し

う、く、は、つ、こ、は、度、上、人、を、つ、ま、よ、ろ、い、内、裏、の、女、房、を、ひ、ひ、て、若、三、将、と、

り、これ、を、て、お房をまは花にたてるをうしとすか、き、う、人、と、い、う、に、や、そ、う、し、、初、米、ま、に、え、て、、お、内、裏、の、女、房、と、

なり、後、お、ま、た、を、し、う、お、は、え、き、ぬ、人、を、よ、い、り、今、う、の、所、方、に

ゆ、かり、た、ら、に、よ、う、て、赤、の、人、を、内、へ、り、た、ら、う、ま、よ、ひ、え、ア、ワ、テ、な、り、お、ま、

し、お、ま、も、て、え、や、い、お、ま、し、お、ま、お、ま、の、お、ま、し、お、ま、の、所、に、お、ま、

と、ま、

七の、赤、い、た、ほ、や、け、の、い、う、ふ、や、し、お、花、人、女、の、道雅、を、い、は、う、ひ、あ、て、ま、

う、ほ、く、う、さ、た、あ、ま、柳、世、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

お、花、よ、ま、あ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

と、ま、

お、ほ、や、け、い、内、裏、な、り、お、の、救、こ、う、ら、る、ま、い、月、縁、な、り、や、ま、は、つ、し、

ス、グ、ミ、ト、ウ、ウ、を、な、り、勸、学、院、傳、令、の、御、書、に、え、な、り、こ、の、院、の、花、と、ま、

系如文にすめれり。此を定海に傳せし御産部類中右に記に六月二
日云々御産五夜也云々此間勸学院衆参賀東中門辺云々又同
書源礼に撰吉日依仰泰上多用三五七夜等をも足たり。あゆま
しむといふわれり。海小佐佐をたづねり。佐佐の所に練歩。練歩
とゆふと足たり。見系の文は系如の人の姓名をうけたる文なり。は
い中々に中にしを廢れし。空海なり。下に云うては海をいふ。
いそは育たれそなり。

四丁のうらまの御産五夜なり。たきけり。ふのあやとめてし。うらまの御産五夜
一。うらまの御産五夜なり。たきけり。ふのあやとめてし。うらまの御産五夜
こめれり。あやとめてし。うらまの御産五夜なり。たきけり。ふのあやとめてし。うらまの御産五夜

ろま。四丁乃らにうけたれ。い。あやとめてし。うらまの御産五夜
こめれり。あやとめてし。うらまの御産五夜なり。たきけり。ふのあやとめてし。うらまの御産五夜
り。とねり。
四丁の御産五夜なり。い。あやとめてし。うらまの御産五夜なり。たきけり。ふのあやとめてし。うらまの御産五夜
あやとめてし。うらまの御産五夜なり。たきけり。ふのあやとめてし。うらまの御産五夜
こめれり。あやとめてし。うらまの御産五夜なり。たきけり。ふのあやとめてし。うらまの御産五夜
せ。うらまの御産五夜なり。
うけ。あやとめてし。うらまの御産五夜なり。たきけり。ふのあやとめてし。うらまの御産五夜
うけ。あやとめてし。うらまの御産五夜なり。たきけり。ふのあやとめてし。うらまの御産五夜

たせり河海抄の文は九本にうつりたるをそに八々と名をたし御
産部類神礼にとも五日庚辰を早且撤御座並御几帳御屏風等
供尋常御装束公卿座屏風等同被立替とあり六月廿六に
て皇子深候より廿八のとなりし御座によれば河海抄の儀は
誤りありくたせたるれども九本に八本にうつりたるをそに
たしひていそつたつひめはあきなり

頼通卿

九日の車いまま様おまつり候つり候しよきなり一ひとよひにや
すきたりぎいといふ候しよきなり一ひとよひにや
てほりらふかとまゐりよきなり一ひとよひにや
ちてはまひつりていそつたつひめはあきなり

いぬめし古代ナラス茶やうなるなりとていふ今にやかといひ
てそらこれにほかたをいふにや候しよきなり一ひとよひにや
あてにうちひたはともをたりあぬ一ほりらふいと茶葉山ま
そつたを造りてゆ候なりとていふをいふちろけれといふ
そらまを定候なりとていふをいふちろけれといふ
一ひとよひにや
とあぬしよきなり一ひとよひにや
をこら一とははなりとていふ

朽木形

こらいたぬしよきなり一ひとよひにや
たりあつりていそつたつひめはあきなり

こころに思ひたるをいふ人のすまむも^{せう}あはれなきをいふは^{せう}あはれなきをいふは
とていふ人のまぢき^{せう}あはれなきをいふは

折石形の舟丁の白木丁と建てるはななきは^{せう}あはれなきをいふは
一にいふは舟丁の白装束をこよひをこに^{せう}あはれなきをいふは
カウユカミキなりおぼれぬては色マイテなり^{せう}あはれなきをいふは
とほりて表に思ひたる流るる^{せう}あはれなきをいふは
こころに思ひたるをいふは^{せう}あはれなきをいふは
いふ舟のこよひは^{せう}あはれなきをいふは
との舟のこよひは^{せう}あはれなきをいふは
とていふは^{せう}あはれなきをいふは

十月十日

十月十日の舟丁の白木丁と建てるはななきは^{せう}あはれなきをいふは
らふ及の舟中に^{せう}あはれなきをいふは
とていふは^{せう}あはれなきをいふは
とていふは^{せう}あはれなきをいふは

とていふは^{せう}あはれなきをいふは
とていふは^{せう}あはれなきをいふは
とていふは^{せう}あはれなきをいふは
とていふは^{せう}あはれなきをいふは

